

三十六人歌仙伝補考

——古今和歌集目録との先後関係の再確認——

新藤 協三

要旨 院政期初頭前後に成立した『三十六人歌仙伝』と『古今和歌集目録』とは、その成立時期が近接するた
め、先後、影響関係が問題とされてきた。この点については迫徹朗氏が、『古今和歌集目録』は『三十六人歌仙伝』
の影響を受けて成立したと結論づけられたが、迫氏の論述が共に群書類従所収本文に拠って展開されたものであるの
で、『三十六人歌仙伝』の原型を留める異本本文によって、改めて両書の先後、影響関係を考えてみた。その結果、
両書の先後、影響関係に関する迫氏の見解は、異本『三十六人歌仙伝』を用いることで更に確実なものとして確認し
得ることがわかる。

院政期初頭前後に成立したと考えられる『三十六人歌仙伝』と『古今和歌集目録』（以下各々『伝』・『目録』と略称）とは、その成立時期が近接するため、先後、影響関係が従来問題とされてきた。この点に明解な断案を下されたのは迫徹朗氏⁽¹⁾である。迫氏は、両書に引かれた「壬生忠岑」の記載に注目され、顯昭の『柿本朝臣人麿勸文』に「卅六人伝云^{藤盛}房撰^{藤仲}、古今目録云^{藤盛}実撰^{藤仲}」とあることを手がかりに、『伝』の撰者を定成男盛房、『目録』の撰者を能成男仲実とされた上で、両者の経歴を詳細に検討された結果、結局は忠岑に関する『伝』と『目録』との記載の比較に立戻られて、『目録』は『伝』の影響を受けて成立した、と結論づけられたのであった。迫氏の論述は、『伝』、『目録』両書のテキストと共に群書類従所収本文に拠って展開されるが、両書の本文に異本と目すべきほどのものが知られない時点では、それは方法論的にも妥当性を認め得るもので、周到な検証と明晰な論旨とに支えられた結論は、それ自体動かぬものと思われる。

ところで、稿者は最近『伝』の異本を数本管見することができたが、それらは、流布本の類従本系本文に比して明らかに前段階の本文を保有するものであり、『伝』の原型もしくは原型に近い形態と考えられる。従来類従本およびそれと同系統の本文しか知られなかった『伝』に、新たに異本の伝本の出現したことにより、今後『伝』にかかわる考察に於いては、異本の存在を無視し得ぬものと思われる。したがって、『伝』と『目録』との先後関係を考える上でも、異本の存在を確認し得ぬ『目録』はともかくも、『伝』については異本本文をも勘案して検証する必要があると考えられる。

以上の理由により、迫氏の論述が盛房、仲実両者の経歴の究明に大部分の紙幅が費やされ、『伝』、『目録』の本文を問題とされたのが、僅かに「壬生忠岑」の条のみであった点をも鑑みて、本稿では、異本『伝』を用いて、専ら両書の本文の比較を通して、内部徴証の面からこの問題を探ってゆきたいと思う。異本『伝』については、前稿⁽²⁾においてその全貌を翻刻、紹介したが、その際、『伝』と『目録』との先後関係についても、新たな視点からの究明が可能なることを示唆しておいたので、本稿は前稿に対する続稿としての意味合いを有するものである。題目を「補考」とした所以である。なお、『目録』の本文は群書類従所収本文に拠ることとする。

二

最初に、管見し得た異本『伝』の伝本を掲げておく。それらは、

(1) 松野陽一氏蔵「歌仙伝」

(2) 宮内庁書陵部蔵（二五〇・六二二）「歌仙伝」

(3) 宮内庁書陵部蔵（二五四・七）『歌集襍抄』所収「歌仙伝」⁽³⁾

(4) 高松宮家蔵（七・二二七・六）「歌仙伝」甲本⁽⁴⁾

(5) 高松宮家蔵（七・二二七・七）『代々集』所収「歌仙伝」乙本⁽⁵⁾

の五本であるが、これらのうち(2)と(5)の四本は、前稿欄筆後にその所在を確認し、管見したものである。これら五本は、相互に補完し得る字句の小異の外は、一面の行数、一行の字数等ほとんど一致し、形態的にも内容的にも全く同種のものである。流布本に対してこれら異本が対立する本文上の特徴点としては、各歌人の伝記が概して流布本よ

りも詳細であること、各歌人の伝記に先立って必ず一首乃至三首の代表歌を掲げること、更には、流布本と全く別種の奥書を有することである。これらの点から、異本こそは『伝』の原型、もしくはそれに近い形態で、流布本は原型を抄出、簡略化した「略本」形態であることが判明するのである。⁽⁶⁾

さて、『伝』と『目録』との両書に伝記を所載される歌人は、柿本人麿、紀貫之、凡河内躬恒、伊勢、在原業平、僧正遍昭、素性法師、紀友則、小野小町、藤原兼輔、壬生忠岑、藤原敏行、源宗干、藤原興風、坂上是則の十五人であるが、このうち、『伝』の異本が流布本とは大きな異同を示し、『目録』とはば一致する例として先ず看過し得ぬのは、「柿本人麿」の条である。流布本『伝』には、

件人。就年々除目叙位尋其昇進無所見。但古万葉集云。大宝元年辛紀伊国時作謔。従車駕云々。今案。件行幸日従駕者定叙爵歟。如古今倭謔集序者。注先誦柿下大夫。可謂五位歟。古今金玉集序云。及奈良御宇。和歌大興。彼天皇知食和歌趣歟。同御時有正三位柿下人丸者。和歌僊也。依件文廻私案。頗可謂相違。以大同之年号奈良之帝。然而万葉集尋人丸在之時。天智天皇御宇以後。文武天皇御在位之間人也。何以称奈良之御時人丸哉。正三位之条以不審と記され、比較的簡潔な記載となっているが、異本『伝』には（本文は松野本に拠るが、松野本本文の欠陥、誤謬と思われる箇所については、他本を校勘して訂正した本文で示すことにする。特に断らない限り以下同じ。なお、以下の論述の都合上、私に記事の頭に①②③④の番号を付す）、

①件人、就年々除目叙位等、尋其昇進、無所見。但古万葉集云。文武天皇大宝元年辛干紀伊国時、作哥。従車駕。見結松。其哥云。

後みんと君かむすへるいはしろの小松かうれを又みけんかも

国史云。大宝元年九月丁亥、天皇幸紀伊国。冬十月丁未、車駕至武漏温泉。戊申、従官并郡司等、進階并賜衣衾。

今案、件行幸日、從駕者定叙爵歟。如古今和歌集序者、注先師柿本大夫。可謂五位歟。

②古今金玉集序云。及奈良御宇和哥大興。彼天皇知食和哥趣歟。同御時有正三位柿本人丸者。和哥仙也。

依件文廻私案、頗可謂相違。或乘竹帛伝。閭巷以大同之主号奈良帝。然而就万葉集尋人丸在世之時、天智天皇御宇以後、文武天皇御在位之間人也。何以称奈良御時之人磨哉。古賢撰集有所見歟。将伝云、書写之誤歟。正二位（ヤヤ）条又以不審。

③日並皇子尊殯宮之時哥云。

久方の空みることくあふきみし御子のみかとのあれましくおしも

件皇子、持統天皇三年四月薨。從天武天皇元年至千件三年、合十八年也。是以案、天智天皇御宇以後人歟。

④明日香皇女施殯宮之時詞云。

飛鳥河しからみわたしせかませはなかるゝ水ものとかからまし

右皇女、文武天皇四年四月薨。件等親王薨時如此作歌。是以注、天智天皇御宇以後、文武天皇御在位間人也。

△以下略▽

とあり、流布本と内容の一致する①②以外にも、③④の記事を有するのである。一方、『目錄』には次の如くに記される（私に記事の頭に①④の番号を付す）。

①以年々叙位除目。尋其昇進。無所見。但古万葉集第二云。大宝元年辛丑幸紀伊國時作歌。從車駕。國史云。大宝元年九月丁亥天皇幸紀伊國。冬十月丁未車駕至武漏温泉。戊申從官并國郡司等進階。并贈衣袈。今案。件行幸日從駕者。定叙爵歟。又如古今和歌集序注。先師柿本大夫。可謂有位之人歟。

②古今金玉集序云。及奈良御宇。和歌大興。彼天皇知食和歌趣歟。同御時有正三位柿本人丸者。和歌仙也。依件文廻

私案頗可謂相違。式乘竹帛伝。閭巷以号奈良之帝。然而藏古万葉集。尋人丸在世之時。天智天皇御宇以後。文武天皇御在位間之人也。何以称奈良御時之人。凡乎古賢撰集有所見歟。将転々書写之誤歟。正三位之条。又以不審。

③日並皇子尊殯宮之時作歌。件皇子持統天皇三年四月薨。從天武天皇元年。至件三年。合十八年也。是以案。天智天皇御宇以後之人歟。

④明日香皇女木施殯宮之時作歌。件皇女文武天皇四年四月薨。件等親王之薨時。如此作歌。是以注。天智天皇御宇以後。文武天皇御在位之間人歟。△以下略▽

異本『伝』と『目録』とは、ここに掲げた記事のあとに、それぞれ別の記事を有するが、一瞥してわかるとおり、ここに掲げたこれら両書の記事は、異本『伝』から歌を除けば、細かい字句の異同の外は内容的に悉く一致するのである。この事實は、両書の間に何らかの依拠関係、即ち、どちらか一方が他方を直接の典拠資料に用いたことを想定せしめるのであって、流布本『伝』のみの時点では考える手がかりの少なかった『伝』と『目録』との先後、依拠関係について、内部徴証の面から新たに究明する手がかりが得られることになり、この点にも、異本『伝』の出現したことの意義が認められるのである。

三

『伝』の異本が流布本と異同を示し、『目録』と特徴的に一致する例として「柿本人麿」の記事を掲げたが、同様のことは「凡河内躬恒」の場合にも指摘できる。流布本『伝』の記載は、

寛平六年二月廿八日任甲斐少目。延喜七年正月十三日任丹波権目。御所。同十一年正月十三日任和泉権掾。延喜四

年大井行幸和歌署所。注散位凡河内躬恒。件日。題九。読人六人。毎題各一首。但躬恒毎題献二首。奥又副一首云。とあるが、『目録』は、次に示す如く少々記事が増加している。

寛平六年二月廿八日任甲斐権少目。延喜七年正月十三日任丹波権大目。御所。同十一年正月十三日任和泉権掾。延喜四年大井行幸和歌署所注。散位凡河内躬恒。件日題九。読人六人。毎題各一首。但躬恒除鶴洲立之外。毎題献二首。又副一首也。

後撰和歌集第十五卷云々。任淡路掾。満秩婦都之由見之。其詞云。淡路掾任満上洛之時。於兼輔栗田山庄詠之者。即ち、『目録』は、傍線を施した「除鶴洲立之外」の語句を持つことと、末尾の「後撰和歌集第十五卷云々」の記事を有する点で流布本『伝』と異なるのであるが、この両書の違いからは、仮りに『目録』が『伝』に依拠したと想定しても、流布本『伝』にない『目録』の文言は、『目録』が他の資料から採り込んだと考えざるを得ない。ところが、異本『伝』の本文は『目録』と字句の小異以外全く一致するのである。

山高み雲井にみゆるさくら花心の行ておらぬ日そなき

我やとの花見かてらにくる人はちりなん後そ恋しかるへき

寛平六年二月廿八日任甲斐権少目。延喜七年正月十三日任丹波権少目。御所。同十一年正月十三日任和泉権掾。

延長四年大井行幸和歌署所、注散位凡河内躬恒。件日、題九読人六人毎題各一首。但躬恒除鶴江立之外毎題献二首。奥又副一首也。依哥多不注書。

後撰和哥集才十五卷云。淡路掾秩満婦都之由見右哥。（イ）云。

ひきうへし人はむへこそおひにけれ松もこたかく成にけるかな

其詞云。淡路掾任満上之時、兼輔卿栗田山庄にて読云々。

流布本『伝』になく、『目録』にある「除鶴洲立之外」、「後撰和歌集第十五卷云々」の部分で、字句に小異を見せながら異本『伝』も有するが、このことから、異本『伝』から歌を除いた本文は、『目録』本文とほぼ一致すると見做し得る。先述の「柿本人麿」の場合をも加味して、この事実から帰結されるのは、『伝』と『目録』との直接の依拠関係は否定し得ぬこと、および、その場合の『伝』の本文は異本系のそれであったということである。この私見を補強するものとしてさらに例証を加えるなら、「紀友則」の記事をも掲げ得る。流布本『伝』は、次掲の如く極めて簡略な記載である。

寛平九年正月十一日任土佐掾。同十年正月廿九日少内記。延喜四年正月廿五日任大内記。

これに対して、『目録』は、流布本『伝』の持つ経歴の記載の外、そのあとに更に記事が続く。

寛平九年正月十一日任土佐掾。同十年正月廿九日任少内記。延喜四年正月廿五日任大内記。先祖不詳。但右兵衛督敏行伝云。紀納言之末葉也者。近江国滋賀郡小関山在道場。号藤尾寺。件所紀納言封地也。

古今和歌集第十六卷哀傷部云。依惟高親王之詠集父之哥。別副歌一首。送彼親王者。是以案之。可謂友則父歌人歟。惟高親王者。貞観十四年二月十一日寢病沈頓。出家為沙彌。二月廿日薨^{云々}。古今撰者其以後也。以前被詠歟。

本院大臣言談之次。於無官送四十年之由。難面作歌。左大臣返歌。以之案之。仁寿斎衡比之人歟。

流布本『伝』になく、『目録』にある記事は、「先祖不詳」以下の①「但右兵衛督敏行伝云……件所紀納言封地也」、

②「古今和歌集第十六卷哀傷部云……以前被詠歟」、③「本院大臣言談之次……仁寿斎衡比之人歟」の三種に分けられるが、これらは、記載の形態と順序とを異にするものの、全て異本『伝』にも見られるものである。即ち、異本

『伝』は、「大内記紀朝臣友則^{先祖不見}」の歌人名表記の下に割注の形で「左兵衛督敏行伝云。紀大納言末葉^{云々}。紀大納

言者近江国滋賀郡小関山在道場。号藤尾寺。件地大納言封地也」として①を持ち、続いて、「秋かせにはつかりかね

そきこゆなるたか玉章をかけてきつらん、「夕されはさほの河原の河霧に友まとはせる千とりなくなり」の二首を記したあと、「寛平九年……」以下の官人としての経歴を述べ、更にそのあとに②、③に相当する部分を次のように記す。

古今和歌集云。依惟喬親王誂集父之哥。別副云、一首送彼親王。是以案、可謂友則父哥人歟。△惟喬親王貞観十四年二月十一日寢治病頓出家為沙弥。年二月廿二日薨^{（つぐ）}（割注）。其哥云。

ことならはことの葉さへもきえなゝんみれはなみたのたきまさりけり

本院大臣言談之次、於無官送卅年之由歎和哥云。

はるゝとかすはまとはすありなから花さかぬ木をなにゝうへけん

大臣返

いまゝてになとかははなのさかすしてよそとせあまりとしきりはする

^{イ本}依如此哥案之、生年仁寿斎衡比歟。

この異本『伝』の記事と先掲『日録』のそれとを比較すると、相互に細部の記述に繁簡の差は認められるものの、根本的には全く同内容であると見做すことができる。

以上の如く、前章で触れた人麿、本章で見た躬恒、友則の例を総合して言い得ることは、『伝』と『日録』との間に、どちらかが他方を直接の典拠資料に用いたことが想定されること、そして、従来流布本『伝』からはあまり明確にし得なかった両者の依拠関係を、異本『伝』を対置することによって、『伝』、『日録』両書の本文から究明する可能性が見出されること、この二点である。

四

『伝』と『目録』とに直接の依拠関係ありとすれば、具体的には、『伝』が『目録』に依拠したのか、『目録』が『伝』に依拠したのか、そのいずれであるのかということが次に問題となってくる。

ところで、迫徹朗氏が、前掲の論考の中で次のように指摘されているのは示唆的である。即ち、迫氏は、『目録』の忠岑の記事、

右衛門府生。御厨子所。定外膳部。撰津権大目。忠実之父。和泉大将定国隨身云々。

と、『伝』（流布本）の忠見の記事、

撰津大目壬生忠見右衛門府生忠岑男。天曆八年五月御記云。為御厨子所定外膳部。以壬生忠見本名実字為定額膳部。天徳二年正月

卅日任撰津大目。

および、『伝』の忠岑の記事、

右衛門府生壬生忠岑先祖不見。大和物語云。泉大将被参故左大臣第之夜。忠岑於階下詠歌云。

とを比較され、

この『伝』に引かれた御記の文に基づき、仲実は忠岑の伝記を書く時、「御厨子所定外膳部」や「撰津大目」を勤めた忠見の父であるという記し方をしたものと思われる。いずれにしても、『目録』を撰するに当たり、古今集歌人でもない忠見の伝記を調査したとは考えがたく、とすれば『目録』の記事の中で『伝』と共通する部分は『伝』に拠ったと見るのが穏やかであろう。

と結論づけられたが、その中の『目録』を撰するに当たり、古今集歌人でもない忠見の伝記を調査したとは考えがたく」とされる観点に注目したい。かような観点から『目録』を瞥見すると、他にも似たような事象を探り当てることができるからである。（なお、流布本『伝』と『目録』とでは、忠見の官職に「摂津大目」と「摂津権大目」との違いが見られるが、異本『伝』には「摂津権大目」とあり、この点でも、異本『伝』と『目録』との近さが認められる。）

さて、『目録』を追ってゆくと、次のような事実の存在することに気づく。『目録』は、『伊勢』に関して先ず、大和守従五位上藤原繼蔭女。七条后宮女房。寛平之間為更衣誕生皇子。

として略伝を記し、そのあと、「繼蔭」、「七条后」の略伝をも記す。『目録』がその歌人本人の略伝のみならず、近親者の略伝をも併記することは決して珍しいことではなく、経歴に不明の点の多い女流歌人についてはまみ見られることで、例えば、

讃岐一首。誹諧。安倍清行女。清行者。大納言安仁男。従四位上讃岐守。上見。

の如く、父親の略伝をも併記するが、女流歌人の場合他にも、「三条町」、「兵衛」、「因幡」、「二条」、「陸奥」、「大輔」、「紀有常女」、「壬生益成女」、「寵」等にも指摘される事実である。したがって、『伊勢』についてもその父親「繼蔭」の略伝を付載すること自体は何ら不思議ではないが、「七条后」の略伝をも併載するのは何故であろうか。その部分は次のように記される。

七条后者。昭宣公三女。諱温子。宇多天皇后。生一女。均子。仁和四年十月六日為女御。寛平九年七月廿六日皇太夫人。六冊。延喜五年五月出家。七年六月八日崩。六冊。

「伊勢」に関する記事が少ないので、その中に出てくる「繼蔭」、「七条后」の略伝をも併載して、全体の記事量の増

大化を企図したことは理解できるが、そのこととは別に、血縁でもない「七条后」の略伝まで付載することについては依然疑問が残る。

一方、『伝』に於ける「伊勢」の記事を見ると、流布本は、

伊勢。八前大和守從五位上藤原繼蔭女。繼蔭元伊勢守。▽（割注）寛平御時更衣云々。雖無所見。皆是兒女子之説也。寛平末年誕生皇子之由見家集。七条后宮人云。承平四年三月廿六日皇后穩子五十御賀御屏風。伊勢猷和哥。同七年十二月十二日陽成院七十御賀御屏風。伊勢猷和哥。

とあるが、異本は、流布本と大きく異なり、以下述べる如く注目すべき本文を持つ。異本は、先ず、流布本の冒頭から「……七条后宮人云々」までは、間に二首の和歌を挿入する以外は、流布本とほぼ一致するが、そのあと、流布本の「承平四年……」の前に流布本の持たない次の記事を有する。

誕生皇子ヲハ桂ニソ置テ養ケル。伊勢ハ后宮々仕シテ夙夜シケルニ、雨降日恋皇子氣色ヲ后宮御覽して被仰。

月の内のかつらの人をこふとてや雨になみたのふりそはるらむ

桂宮御返しハ宇多天皇女。母仲野親王女。天慶八年四月廿八日薨。号桂宮。▽（割注）

久かたの中におひたる里なればひかりをのみそたのむへらなる

皇子及八歳薨者ハ件皇子誕生七条宮立后之間歟。▽（割注）、家集之誤也。不慥歟。

東七条后藤温子ハ仁和四年十月六日入内九日為女御。寛平九年七月廿六日為皇大夫人。延喜五年五月出家。七年六月崩。年三十六。昭宣公オ三女。▽（割注）

異本はこのあとに、流布本の「承平四年……」以下に相当する記事が続くが、見落とせないのは、割注の形で「東七条后藤温子」の略伝を載せる点である。これは、異本『伝』特有の記事に「七条后」のことが記されるためであろう

が、その文言は、前掲『目録』の記載と酷似する。

これらのことから考えられるのは、『目録』が「伊勢」に関して、血縁でもない「七条后」の略伝まで併載したのは、依拠した資料にこの記載が存在していたのを反映したものであること、即ち、先に『伝』と『目録』とに直接の依拠関係の濃厚なことを述べたが、『目録』は『伝』のこの部分を捨て切れず、ほぼ同文で引用したのであらうということである。このように、『目録』が『伝』に依拠したとの想定に立てば、以下に述べるように、よく理解し得る事象は他にいくつか見出し得るのである。

五

先に第二章で、『伝』の異本が流布本とは大きな異同を示し、『目録』と特徴的に一致するものとして「柿本人麿」の記事を掲げたが、もう一度その記載に立戻って両書の記述を見直すと、細かい点ではあるが、『伝』先、『目録』後と考えざるを得ない本文に逢着する。それらはいずれも②の部分に存在するが、

(1) 或乗竹帛伝（伝）

式乗竹帛伝（目録）

(2) 間巷以大同之主号奈良帝（伝）

間巷以号奈良之帝（目録）

(3) 然而就万葉集尋人丸在世之時（伝）

然而藏古万葉集尋人丸在世之時（目録）

(4) 將伝云書写之誤歟(伝)

將転々書写之誤歟(目録)

(1)は「或」を「式」と誤り、(2)は「大同之主」を欠き、(3)は「就」を「蔵」と誤り、(4)は「伝云」を「転々」と誤り、いずれも『目録』→『伝』の経路からは生じ得ないと見做されるものである。なお、このうち(2)、(3)は流布本『伝』にも存在するが、(2)「以大同之年号奈良之帝」、(3)「然而万葉集尋人丸在之時」とあり、異本『伝』と小異を示す。

「柿本人麿」の条以外にも、細かい本文の部分に、『目録』が『伝』に拠ったと思われる徴証は見出し得る。『目録』は、「紀貫之」の条に於いて、「同(延喜)七年二月廿七日任内膳典膳。」の記述のあとに、割注で「与宮道潔興相替」と記す。この割注は流布本『伝』には存在しないが、異本『伝』には「与宮道潔興相替」として『目録』と同文で存在する。これなども『目録』が『伝』(異本)に拠ったと考えることにより理解される点であるが、『目録』は「宮道潔興」の条の「(昌泰)三年五月十五日任内膳典膳。延喜七年二月廿九日越前権少掾」の記述のあとに、「与貫之相替」の割注を有する。おそらくこれは、「貫之」の条の割注の記載を勘案して付されたものと思われる。

この外、『目録』が『伝』に依拠したと思われる痕跡は、「僧正遍昭」の条にも指摘し得る。『目録』は、『伝』に記された遍昭の記事を、「良峯宗貞」と「僧正遍昭」との二項に分載した形で有するが、このうち、「良峯宗貞」の項の方に記された、「同(嘉祥三年)三月廿一日帝崩。庚子定御喪諸司装束司。丙午出家^{五十}。為僧。」の傍線部分は、流布本『伝』には存在しないが、異本『伝』には、「庚子定御葬諸司、為装束司。」とあり、「為装束司」と記す点で、『目録』よりもわかりやすい文言となっている。この記載も、『目録』が『伝』(異本)に依拠したと想定すれば、よく納得されるものである。

以上に見て来たことは、『目録』が『伝』に依拠したとする立場に立てば、極めて自然に理解される事象であり、『伝』→『目録』の経路の想定に一応の蓋然性を付与するものであるが、こうした観点を敷衍すれば、『目録』の「小町」の記載「出羽国郡司女」なども、『伝』の流布本になく異本にある割注、「出羽国郡司女也」に拠ったと見ることが可能であり、更には、迫氏が指摘された『目録』の「壬生忠岑」の「右衛門府生。御厨子所。定外膳部。撰津権大目。忠実之父。和泉大將定国隨身云々」の傍線部も、『伝』からの転載であることが確認されるのである。

六

これまで縷述したことを概括すれば、『伝』と『目録』との依拠関係は、流布本『伝』ではなく異本『伝』を対置せしめることによって、より明確にし得ること、そして、それは「柿本人麿」、「凡河内躬恒」、「紀友則」等の条の記載に如実に窺われること、また、「伊勢」の条の記事から、『伝』→『目録』の経路が想定されること、更には、その経路を想定すれば、他にも理解のゆく事象が存在すること、などであった。

ところで、異本『伝』には、その成立を示唆する注目すべき奥書があり、その冒頭の、「承保二年依左府仰盛方注出之」の一文に従えば、『伝』の成立は承保二年（一〇七五）ということになる。一方、『目録』の成立年時は今のところ不明だが、迫氏は、『目録』の撰者に擬せられる能成男仲実の経歴を勘案されて、その成立を永久元年（一一一三）あるいは同二年以後と推定される。以上に従えば、両書の本文に拠るまでもなく、『伝』と『目録』との先後関係はおのずから明らかであろうが、その影響関係をも究明すべく、専ら両書の本文を比較、考究し、異本『伝』の奥書については措いて顧みなかった。この異本『伝』の奥書については、その中に記される「盛方」なる人物の詳しい

閨歴が不明であるため、その信憑性にもなお一縷の疑問が残り、本稿ではこの奥書の面から両書の先後関係について詳述することを避けたが、今まで述べたことから、『伝』→『目録』の経路に蓋然性を認め得るとすれば、このことが逆に、異本『伝』奥書の信憑性を傍証することになるとも考えられよう。

なお、『目録』の現存本文については、仲実撰の本文とは別で、平安末期に勝命の撰したものとされる西村加代子氏の論があるが、西村氏の指摘される点は、本稿で採り上げた部分とかわるものでなく、論旨に抵触しないので、特に考慮に入れなかった。将来、原撰本『目録』の全体像が明確になった場合には、改めて『伝』と『目録』との先後、影響関係を見直す必要が生じるかとも考えられるが、その場合にも、本稿の論旨はおそらく矛盾しないものと思われる。

本稿は、新出の異本『伝』の本文に拠って、迫氏の見解の驕尾に付してその跡付けを行なったものであり、もとより迫氏の結論を一步も出るものではない。副題を「――再検討」とせず「――再確認」としたのもそのためである。

注

- (1) 『古今和歌集目録』と『三十六人歌仙伝』の先後——忠岑の伝記をめぐって——（『中古文学』第十九号、昭和五十二年五月）
- (2) 「異本三十六人歌仙伝——翻刻ならびに解説——」（『国文学研究資料館紀要』第八号、昭和五十七年三月）
- (3) 一冊本。題簽に「歌集樵抄十五種」、その右傍に「代々集和歌之序」と打付書きし、「代々集和歌之序例」以下の十五種、十九書を収める。
- (4) 内容は前掲注（3）と同じものを収めるが、題簽を欠く。高松宮家蔵の他本と区別するため、私に「甲本」と仮称する。
- (5) 表紙左上に「代々集」と打付書きし、「代々集和歌之序例」以下の四書を収める。前掲注（4）の「甲本」と区別するため、私に「乙本」と仮称する。

(6) 拙稿『三十六人歌仙伝』考——作者ならびに成立年時——（『国語と国文学』昭和五十七年十月号）
 (7) 『古今和歌集目錄』作者考（『中古文学』第二十五号、昭和五十五年四月）

△訂正△ 前号（第八号）の拙稿「異本三十六人歌仙伝」の本文に誤りがありましたので、次のように訂正します。

頁	行	項目	本	文
51	9	人麿	從官并群司等	從官并群司等
"	12	"	有正三位	有正三位
54	3	躬恒	延長四年	延長四年
55	16	家持	鎮守府將軍。在在無幾	鎮守府將軍。同二年正月廿八日論奏署 <small>（イ）</small> 參議從三位行春宮大夫兼陸奥出羽按察使
57	11	業平	鎮守府將軍。在任無幾	鎮守府將軍。在任無幾
"	13	遍昭	ラシホノ山モケフヨリハ	ラシホノ山モケフコソハ
58	11	素性	未の露	未の露
59	3	友則	留性大法師為權大律師	留性大法師為權律師
"	7	"	はつかりかねそきこゆなり	はつかりかねそきこゆなる
"	8	"	貞観十四年二月十四日	貞観十四年二月十一日
"	13	"	ことならはこと。葉さへも	ことならはこと。の葉さへも
61	5	兼輔	生年仁和	生年仁和
64	1	公忠	子を思ふみにまよひぬるかな	子を思ふみにまよひぬるかな
"	2	"	正四位正。大藏卿	正四位下。大藏卿
"	"	"	道齋	道濟

79	77	74	"	"	71	"	"	70	67	64
15	13	10	13	9	8	6	5	4	15	8
"	"	解説	忠見	"	能宣	"	"	是則	信明	公忠
<p>菅原是綱。→菅原是綱。</p> <p>天曆二年時に→天慶二年時に</p> <p>次に掲げる二本統に→次に掲げる二系統に</p> <p>たゝ春の日にませたらなん。→たゝ春の日にませたらなむ。</p> <p>寛和元年十月廿日→寛和元年十一月廿日</p> <p>朔旦冬至祭主賞→朔旦冬至祭主賞</p> <p>年ことの春わかれを→年ことの春のわかれを</p> <p>清邦二男→清邦三男</p> <p>十七年正月任少内記。延長二年→十七年正月任少内記。廿一年正月轉大内記。延長二年</p> <p>五位藏人中補之→五位藏人申補之</p> <p>依昇賀也→依晏賀也</p>										